



Title	「自然の一部」であることを自然の中から信じること ：書簡32におけるスピノザの部分全体論を読むために
Author(s)	立花, 達也
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2019, 53, p. 25-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81477
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「自然の一部」であることを 自然の中から信じること

——書簡32におけるスピノザの部分全体論を読むために——

立花達也

キーワード：スピノザ／書簡／部分と全体

十七世紀の哲学者スピノザは、同時代人と交わしたとある書簡¹⁾において「部分 pars」と「全体 totum」の概念について論じている。この書簡は研究者によって頻繁に引かれ、様々な仕方で読まれている。だがその際に、スピノザがいかなる文脈において部分全体論を提示しようと試みたのか、そして、そのテキストの一部分を切り取るにしてもそれが他の部分といかなる関係にあるのか、といった点はしばしば見過ごされているように思われる。そこで筆者は、くだんの書簡32に至るまでに文通相手のオルデンバークとスピノザのあいだにあった対話に着目し、そして実際に書簡のテキストを途中まで読み進めることによって、スピノザの部分全体論がどのようなものとして理解されるべきかを明らかにしたい。要するに、書簡32を読解するための土台を提供するのが本稿の目的である。

本稿は以下のように進む。第一節では、書簡32によって何がねらわれているのかを確認することでスピノザの部分全体論が置かれている文脈を明らかにする。第二節では、自然の中には美しさや醜さもないという彼の前提的主張が、部分全体論とどう関わるかを考察する。第三節では、スピノザの部分と全体の概念の基礎的な考え方を、関係の水平性に注目することによって抽出する。その後、この考え方をあらわすために与えられた血液という例を見て、それによって何が強調されているのかを考察する。第四節では、部分全体論をよりよく示すために与えられた虚構、すなわち「血中の虫」の比

喩をいかに解釈するかをめぐる、部分全体論にいわば俯瞰的な視点を導入するような解釈を退ける。以上の議論から、書簡32のそれ以降のテキストをいかに読むべきかについて方針を与える。

1. 書簡32の部分全体論に至るまでの文脈について

書簡という形式上、対話する二人のあいだでどのような文脈が成立しているのかを無視しては、その議論を理解することは困難となるだろう。本節ではそうした文脈を確認することで、スピノザによる部分全体論のねらいを明らかにする。そしてそこから、この書簡の読解にいかなる制限が与えられるのかを考えたい。

この書簡の文脈を理解するためには時代背景を確認する必要がある。研究者のアーロン・ギャレットは当時の社会状況に着目し、書簡32におけるスピノザの答弁に至るまでに彼の文通相手であるイングランドの外交官、オルデンバーグとなされたやり取りを重要視している（cf. Garrett 2003, § 1; 同様のアプローチとして、Sikkema 2015）。そこから分かるのは、彼らが書簡を交わしていたのはオランダがローストフトの海戦の雪辱をかけ、イングランド侵攻に向けて海軍の再編成に力を尽くしていた最中であるということだ。彼らは一触即発の状況下でもなお、敵対する国の民としてではなく、あくまで哲学者として対話を交わしていたのである²⁾

この背景を前提にすると、書簡29におけるオルデンバーグの嘆きが理解される（cf. IV 165, 9-14）。彼は戦争を嘆き、軍人たちの勇気を「人間的」ではなく「動物的」な勇気であるとして、価値を引き下げる。また彼らを揶揄し、もし人間が「理性の指導」にしたがって行動できたなら戦争など起こりえなかっただろうとも言う。彼は「人間の存在する限り悪徳も存在する」のだとし、人間の愚かさへの嘆きを諷めているようでもあるが、その言葉はむしろ皮肉として響く。次のスピノザの言葉はこうした皮肉めいた書きぶりに対する応答として読まれる。

この戦乱は私を笑いにも涙にも誘いはしません。むしろただ哲学すること、そして人間の本性をいっそうよく観察することに駆るばかりです。実際、人間が残りのものと同様に自然の部分 [pars naturae] に過ぎないことを思い、またどのように自然の各部分がその全体と一致し、どのようにそれが残りの諸部分と連結しているかは私に知られていないことを思うときに、人間の本性を嘲笑することは私に許されず、ましてやこれを悲嘆することは許されないと考えるのです。(Ep. 30. IV 166, 8-14. 傍点引用者)

人間の本性を嘲笑することなく、理解するように努めること。こうしたある種の倫理的態度は『政治論』や『エチカ』にも見られる (TP 1, 4; E3Prae)。後者においてスピノザは「理性に反した空虚な、不条理な厭うべきものとして彼らが罵る事柄を厳密な推論で証明しよう」としている。というのも、自然においてすべては同じ必然性によって帰結すると彼は考えているからだ。ここには、人間からその特権性を奪い、人間を自然における他のものと同列に置く考え方がある。だが我々にとってより重要なのは、書簡 32においてはこの態度が、人間／動物や理性／非合理といった対立を無化することへと向けられていることである。

スピノザによる「自然の一部」論と部分全体論はなによりもまず、上記の倫理的態度の理由として提示されるのだが、この趣旨はオルデンバーグによる返事によってずらされてしまう。オルデンバーグは、「自然の各部分がどのように [=いかなる仕方では *quomodo*] その全体と一致し、かつどのように [=いかなる関係によって *qua ratione*] 残りの諸部分と連結するのか」という問題について、あなたが解決を見出しているなら教えて欲しいと返す (Ep. 31. IV 167, 10-14)。彼がそのような乞うたのもわからないではない。スピノザは先の引用部に続けて、「こうした認識の欠如のみから、自然の中の或るもの [...] が私にはかつて空虚で、無秩序で、不条理であるように見えたのだ」と述べているからだ (Ep. 30. IV 166, 15-8. 傍点引用者)。なるほど、

欠如していた「認識」とは「どのように自然の各部分とその全体と一致し、どのようにそれが残りの諸部分と連結しているか」についての認識だろう。いまやこの「認識」を備えた哲学者の目には軍人の勇気もまた合理的なものとして映るのだろうか、と思われても仕方がない。

だが、先の引用と書簡32の冒頭を見ればこの理解が間違いであるとわかる。スピノザの考えによれば、我々はそうした認識を得ることができない。そのためには「自然全体とそのすべての部分を知る必要がある」のだが、それは不可能であるからだ（cf. IV 170, 3-6）。そのためにはあくまで、経験的な知識が必要とされているのである。それゆえ、スピノザは相手の要求を次のように解釈する。すなわち、あなたが尋ねているのは、我々が「自然の一部」としてその全体と一致し、残りの諸部分と連結しているのだと私が信じている理由なのでしょう、と。そして彼は、この理由を明らかにするために自らの部分全体論を展開するのである。

要するに、書簡32の部分全体論の直接的なねらいは、自らを「自然の一部」として信じる理由を提供することにあるのだが、この部分全体論はもとをたざせば、先の引用で触れたある種の倫理的態度の理由として機能していたということになる。この書簡における議論に至るまでの文脈には、こうしたねじれがある。

以上の対話を念頭におくならば、書簡32において論じられる部分全体論は少なくとも二つの制限を受けるはずである。第一に、この部分全体論はスピノザのある種の倫理的態度になんらかの説明を与えるものであるべきだ。兵士の勇気を動物的勇気だと言って嘲笑したり、嘆いたりすることは許されないとする彼の態度が、自らが「自然の一部」であることへの信から導かれるものでなければならない。少なくとも、彼の部分全体論はそうした態度を妨げるものであってはならないだろう。そして第二に、所与の全体からその部分について特定するような部分全体論も、所与の複数のもの（部分）からそれらによって構成される全体について考える部分全体論も、ここでは排除されるべきだ。というのも、我々は自然全体とそのすべての部分の両方について

て経験的な認識を得ること不可能だということが前提にされていたからだ。ところで注意すべきは、以上の制限は書簡32に対する一定の解釈を排除するが、それは必ずしも次節から筆者が提示する読解のための必要条件ではないということだ。つまり、本節での議論が仮に誤っていた場合にもなお、本稿における書簡32の読解は個別に擁護されうるだろう。

2. 部分全体論の前提をどう理解するか

以上の文脈を受けつつ、実際に書簡32のテキストを読んでいこう。スピノザは、部分と全体について論じるに先立って、自らが置く前提を明らかにしている。この箇所は顧みられないことも多いが、それをどう理解するかはこの書簡の読解において重要である。というのも、スピノザの部分全体論は以下の引用の直後に「それゆえ igitur」と挟んで続けられているからだ。つまり、この引用に対する理解に応じて部分全体論の理論的背景も変わってくるのである。

まずご注意くださいのは、私は自然に対して美も醜も、秩序も混乱も認めていないということです。事物は、我々の表象力に関連してでなくては、美しいとも醜いとも、秩序立っているとも混乱しているとも言われえないのであります。(IV 170, 7-11)

この前提について、次のような解釈がありうるかもしれない。すなわち、スピノザはここで美や醜、秩序や混乱といった概念を「理性の有 *ens rationis*」、すなわち実在の対象を表示しない概念として提示したうえで、部分と全体という概念もまた理性の有と見なしているのではないか。理性の有とは、スピノザ自身の説明によれば、「認識された事物をより容易に記憶に保存し、想像し、説明するのに役立つ思惟の様態」であり、かつそれが表示する対象を知性の外部にもたないような概念であるとされる (cf. CM I, 1)。

このように書簡32の部分全体論を理性の有との関連において読む解釈、いかえればそこに非実在的な部分全体論を見出す解釈は少なくない（Guigon 2011, Ramond 1995, Rosenthal 2019）。この解釈によれば、彼の部分全体論は自然について積極的なことを論じておらず、それは他のことを理解させるための教育的な意義しかもたないことになる。³⁾

この解釈を成り立たせるテキスト上の根拠を確認しよう。まず大事なこととして、この書簡においてスピノザは「理性の有」という語を用いていない。だがそれでも、この解釈を支持するテキストは豊富である。たしかに、引用部の記述は『形而上学的思想』における理性の有についての記述や、『エチカ』に見られる、理性の有と類似の機能をもつ「表象の有」についての記述と類似している（CM I, 5; Elprae）。また実際に、スピノザはそれらの記述において、先の引用部に出てきた「秩序」を理性の有に、「秩序、混乱、美、醜」を表象の有に数え上げている。加えて、『神・人間ならびに人間の幸福についての短論文』（以下『短論文』）では「部分と全体」が理性の有であり、それらは自然の中に存在しないとはっきり書かれている（cf. KV I. 2）。これらの箇所から、スピノザにとっては部分と全体という概念もまた理性の有の一つにすぎないと解釈される。

だが筆者は以下の二つの理由から、この解釈の採用はベターではないと考える。第一に、以上のテキストの中でこの解釈を直接的に支持するのは『短論文』のみだが、それは根拠として必ずしも適切ではないという点である。スピノザは同書の別の箇所で「時計」の比喩をとりあげて部分の自立性を示している。すなわち、時計の部分は各々が他のものなしに理解され、それらから成る全体（時計そのもの）はその理解のために必要ないのである（cf. KV. I. II）。自然の中に部分はない、あるいは自然は部分をもたないという『短論文』での主張は、こうした他の物から独立して考えられる部分の概念を前提にしたうえで、自然ないし物的実体をそうした部分から構成されるものとみなされるのを防ぐためのものと考えられる。さもなくば、自然ないし物的実体はその部分に依存することになり、その自立性が損なわれるからだ。

だが少なくとも、『エチカ』においては互いに依存しあう「様態的に区別された部分」が案出されている（E1P15S）し、後に見るように書簡32における血液の例はその諸部分が互いに適合し、作用しあうことを念頭においたものである。したがって、部分が異なる仕方では概念されているならば、先の『短論文』での主張をそのまま受け入れることの正当性は自明ではないということになる。⁴⁾そして第二に、スピノザは「自然の一部」という語を主著『エチカ』において積極的な仕方では用いているという点である（cf. E4P2, P4）。たとえば、『エチカ』には「人間は自然の一部でないということは不可能であり、「人間の力能は神あるいは自然の無限なる力能の、いいかえれば「…」神あるいは自然の無限なる本質の一部である」とされている（E4P4, D. 傍点引用者）。少なくとも、命題や証明といった論証の流れのうえに見いだされる語彙が教育的配慮のみによって用いられているとみなすのは難しいだろう。⁵⁾

それゆえ、筆者は別の解釈を支持する。すなわち、スピノザは美醜や秩序、混乱といった概念をたんに理性の有としてではなく、なんらかの優劣を含意する価値語としても提示している、と読むのである。この解釈は、彼の「自然の一部」論が、自然について理想や目的を見出そうとする思想と無関係だという帰結を導く。たとえばギャレットによれば、スピノザは自然を全体としてとらえる際に、人間中心主義と目的論の形式を排除しているという（cf. Garrett 2003, 34）。

この解釈は、第一の解釈において見られたように、先の引用部が『形而上学的思想』と『エチカ』における理性の有ないし表象の有についての記述と関わることを否定しない。むしろ、こうした概念が用いられる別の文脈を考えることで、同様のテキストをその根拠として利用できる。スピノザは表象の有についての議論を下敷きにして、よい・わるいといった概念が対象そのものの性質を表すのではなく、それが我々を触発する仕方を表すのだと主張している（E4Prae）。そこで彼は、人工物のよい・わるいは、それが作られた目的に照らして、それに適うかどうかによって考えられるとしたうえで、

我々が自然物によい・わるいといった価値を付与するのは自然それ自体が目的をもつという我々の偏見（目的論的自然観）に由来するのだと説く。要するに、彼は価値の優劣を自然に見出す考え方を反目的論な自然観に依拠することで否定するのであり、表象の有についての議論の射程はそこにまで及ぶのである。

そのうえさらに、この解釈を採用すべき理由を挙げておこう。なによりもまず、この解釈は前節で確認した文脈と整合する。この解釈によれば、彼は自然の中の対象に対して上述の概念を適用することの否定によって、部分と全体の実在性を否定したのではなく、両者のあいだのなんらかの優劣を否定しようとしたということになる。このことは、スピノザの部分全体論のねらいに適っていると思われる。というのも、そのねらいは人々の徳に人間的／動物的といった優劣を見出すオルデンバーグに対して異なる見方を促すことにあったからだ。またもう一つのより積極的な理由として、この解釈は次節で見る部分全体論の考え方と整合する。それは簡潔に言えば、部分と全体を大小の順序ではなく、ある事物と他の事物の水平的な相互関係によって規定するという考え方である。スピノザがここで、（ふつうの仕方では考えにくいことだが）部分と全体のあいだの大小の順序を認めることすら相対化しようとしていると仮定するならば、部分と全体の概念に対して彼が与える独特の規定はより理解しやすいものとなるだろう。

3. 部分全体論の基礎と、血液という例へのその適用

本節では、書簡32の部分全体論の基礎となる記述から、事物と事物のあいだの水平的な関係に着目して部分と全体を区別するスピノザの考え方を抽出する。そのあとで、この考え方を彼が与えた血液の例を見ることによって肉付けする。

それゆえ、部分の連結について私が理解しているのは、ある一つの部分

の諸法則ないし本性ができる限り自らに対立しないように他の部分の諸法則ないし本性に自らを適合させる [sese accommodare] こと、このみです。全体と部分に関しては、私はある事物を、可能な限り互いに調和する [inter se consentire] ようにそれらの本性が互いに適合する [inter se accommodare] 限りにおいて、ある全体の諸部分と見なします。反対に、互いに不調和である [inter se discrepare] 限りにおいて、他のものから区別される各々の観念が我々の精神のうちに形成され、したがってそれは部分ではなく全体と見なされるのです。(IV 170-1, 12-1)⁶⁾

ここでは二つのことが述べられている。第一に、諸部分の連結の要件である。それは、ある部分が有する「諸法則ないし本性」を、それが他の部分のそれと対立しないように「適合」させることである。この適合が具体的にいかなる事態を指すかは明らかではないが、次の二点を指摘できる。まず、「できる限り quod minime」や「可能な限り quoad fieri potest」といった度合いの表現が示すように、ここではおそらく、予め定められた何らかの基準において一致しているとか、何らかの性質を共有しているといったことが問題になっていない。実際にスピノザは、正確には他の部分に「自らを適合させる」と述べているのであり、ここで適合が意味するのは状態ではなくむしろある作用、あるプロセスであるとみなすべきだろう⁷⁾。この点は、彼が適合という語彙をもっぱら、他人にうまくあわせて自分の本性を変えることを表現するために用いていることから確かめられるだろう (cf. E4P4S, E4App6-7, E5P7D, TTP 4)。適合とは、他の部分と調和するように自らを変化させるプロセスであると言うことができる。

そして第二に、ある事物が部分と見なされるか全体と見なされるかの基準である。その基準とは、先に触れた「適合」に他ならない。この適合によって諸事物が互いに調和する限りでそれらはある全体の部分と見なされ、また反対に、(互いに適合しあわないがゆえに) 不調和である限りでその各々が全体と見なされるのである。要するに、ある事物が部分であるか全体である

かは、それが他のものといかなる関係にあるかに依存しているのである。この関係が適合的であれば他のものとともにある全体の部分となり、それが非適合の関係であれば各々が一つの全体として見なされるということだ。

このように、スピノザの部分全体論の中心的なアイデアは、あるものの部分性を同じ水準の他のものとの関係、すなわち水平的な関係によって定義することにある⁸⁾。スピノザは一見すると、あるものが部分であるか全体であるかは、部分を包含する全体の範囲に相対的であると述べているようであるが、その見方は必ずしも正確ではない。というのも、ここで部分と全体はいわゆる部分全体関係、いうなれば垂直的な関係によっては説明されていないからだ。

次に、先に見た部分と全体の概念が「血液」という例に適用されているのを見ることによって、部分と全体を説明するための語彙が機械論的な語彙、とりわけ「運動 *motus*」へと移行しているのを確認しよう。その際に筆者は、スピノザが血液について有していたであろう知識に着目することとする。

例えば、リンパや乳糜、その他の粒子の運動が、それらのあいだでまったく調和しすべてが同時に一つの流体を構成するように大きさと形状に関して互いに適合しあうとき、まさにそのときに限り乳糜やリンパ、その他は血液の諸部分として見なされるのです。反対に、リンパの諸粒子が形状と運動に関して乳糜の諸粒子と不調和であると我々が概念する限りにおいて我々はそれらを部分としてではなく全体として見なすのです。
(IV 171, 1-8)

まずは血液という題材によって与えられるであろう内容について、アンドローによる比較研究を参照したい。彼によると、引用部における血液の記述は、スピノザが所持していたニコラウス・ステノの著作における血液の考察と連関しているという (cf. Andrault 2014, 67; Steno 1662)。書簡32の発想源を推測する研究はいくつかあるものの、書簡において実際に用いられている

血液というモデルがもつ意義を論じた研究は他に例を見ない。⁹⁾少なくとも彼の比較研究は、スピノザによる血液の記述を同時代人がどう理解しえたのかを説明するはずだ。

論文「口腔腺とそこから生ずる唾液管について」において、ステノは動脈に含まれる血が唾液の起源であることを証明しており、その際に彼は、ある要素が血液循環という作用に参加しているかどうかをその色によって判断することは適切ではないと主張している (cf. Steno 1662, 30-1)。「リンパ」と「乳糜」はともにこの論文で取り上げられ、それらは動脈血を構成するだけでなく、色の異なる静脈血とも合流し、ともに身体全体に栄養を行き渡らせているとされる。¹⁰⁾そして、ステノはのちにより抽象化を押し進め、諸物体の合一はそのすべてが一緒に参加するところのある運動によって与えられるという考えにまで進むとされる。つまり、血液全体を構成する要素は、それによってともに血液循環へと参加するところの共通の運動によって考察されるべきなのである。

ステノの著作から離れてみても、スピノザがここで運動に焦点を当てていると見るのは不思議ではない。自然は最終的には運動と静止（およびそれらの諸法則）によって説明されるべきだというスピノザの考えはすでに交わされた書簡 (Ep.6) によって知られている。実際に彼は粒子の「大きさ *magnitudo*」や「形状 *figura*」への言及をこの箇所だけにとどめており、これ以降では粒子の「運動」とそれらの「関係 *ratio*」だけに焦点を当てるようになる（たとえば、「血液の諸部分の運動の相互に対する関係」、「血液と外的諸原因の運動の相互に対する関係」など (IV 171, 11-13. 傍点引用者)）。

さらに形式の観点から指摘できることとして、ここでスピノザは血液がたんに「リンパ、乳糜、その他の粒子」から構成されると述べているのではない。むしろ、それら構成要素が有する運動とその適合こそがそれらの部分性（と同時にある全体の存在すること）の条件となっている。つまり、ある全体について考えるためにはその構成要素とされるものたちを集めてくるだけでは不十分ということだ。いや、第一節で見た解釈に対する第二の制限を念

頭に置くなら、むしろ彼は構成要素の列挙を避けているとも考えられる。「その他の粒子」という語彙は科学の発展によっていつか見出されうる未知の要素を考慮したものともみなしうるけれども (cf. Andrault 2014, 69)、要素をすべて特定することを必要としない彼の部分全体論の徴候であるとも言える。まとめると、ある物体の部分性はその性質からではなく、それと他の物体の運動の水平的関係から帰結するのである。

4. 血の中に住む虫という虚構

血液という例を提示したあとにスピノザは、奇異な虚構を読者に要請する。すなわち、「血液の中に一つの微小な虫が住んでいる」と虚構せよというのである。この「血中の虫」は「宇宙の中の人間」を表現するアナロジーとなっており、かつその認識は限界づけられていると述べられている。「全自然とそのすべての部分」を知らないにもかかわらず、「自然の各部分がその全体と一致し、それが残りの諸部分と連結している」ことを信じることができるのはなぜか、という観点からすると、この虫と人間の類比は重要である。

この虫は血液全体を把握しえないが、それでも視覚 [visus] と理性 [ratio] を持つと仮定される。すなわち、「リンパや乳糜、その他を識別する視覚」と、「各々の粒子が他の粒子との衝突によって、ときに反発したりときに自らの運動を他の粒子と共有したりすることを観察しうる理性」である (IV 171, 9-12)。

この虫は、ちょうど我々が宇宙のこの部分に住んでいるようにこの血液の中に住んでいるでしょう。そして、この虫は血液の各粒子を部分としてではなく全体として考察するでしょうし、またどのようにすべての部分が血液の一般的本性によって規定されているのかを、そしてどのようにすべての部分が血液の一般的本性が要求するとおりに互いに適合しあうように強制され、一定の関係において互いに調和するようになってい

るのかを、知りえないでしょう。(IV 171, 13-18. 傍点引用者)

ここに第三節で見た部分全体論の基礎を適用してみよう。虫は自身に対して外部の物体であるリンパや乳糜などを見て、それらが形状や運動において不調和であると観察するとき、それらの各々を一つの全体として考察するだろう。むろん、この虫はたとえばリンパを構成する諸粒子のあいだに運動の調和を見出し、それらをリンパの部分として考察することはできるはずである。だがしかし、目の前にあるリンパや乳糜、そして自身も含めたすべてがなんらかの全体（すなわち血液）の部分であるとは考察できないだろう。血液の中で生活している虫にはおそらく、自分がそこに住み、その一部を成しているところの全体を視覚によって把握することも、そのふるまいを観察することもできないからだ。

詳しくは別稿に譲るが、この後にスピノザはこの虫の例からすぐさま離れ、我々人間が自らを自然の一部として考察するための理路を提示しようとしている。このとき、（血液の中の）虫と（血液を一部とする）人間のあいだの観点の差異を強調する解釈がありえるかもしれない。つまり、人間の方がいわばより俯瞰的、より外部的な観点に立っているという点からこの書簡の部分全体論を読み解くのである。たしかに、虫が血液の構成要素であり、血液が人間の構成要素であるという点からすれば、人間のほうが虫よりもいわば高いところから眺めていると言うことはできそうである。この点を強調してラモンは、この虫の比喩をプラトンの洞窟の比喩に等しいものとみなしている（cf. Ramond 1995, 210）。洞窟の如き血液に住まい、虚像だけを眺めるよう強いられている虫に反し、外へと出ていける我々には真なる認識が開かれている、とでも言うように。

だが、筆者は以下の三つの理由から、こうした解釈は採用しえないと考える。第一にこの解釈は、この虫と同様に我々の認識もまた限界づけられていること忘却させてしまう。実際には、スピノザはあくまで虫と人間を取り囲む状況を同一のものとして設定している（引用部の傍点箇所）。そして、引

用部の後半は明らかに、宇宙とその全部分についての認識を欠いているという我々の状況を、虫において言い換えるための記述である。第二に、虫に対して人間を特権化する先の解釈は、少なくとも明示的にはテキストに支えられていない。この書簡には虫と血液と人間のあいだの（非スピノザ的な意味での）「部分と全体」の相対的な優劣についての言及がまったく欠けている。それどころか、虫と人間のあいだにヒエラルキーを導入することは、第二節における解釈に対する第一の制限と対立する。第三に、こうした解釈は第三節で確認した部分全体論の基礎をまったく活かしていない。その解釈は部分と全体に空間的な入れ子構造を安易に読み込み、諸物体間の水平的な関係に対して超越的な視点を想定しているからだ。これはまた、自らを部分として含む全体を予め知っておくことを要請し、それゆえ解釈に対する第二の制限に反すると思われる。以上の理由からラモンのような解釈は採用しえない。

かくして我々は、この虫が血液の中でいわば内在的な視点から自らを血液の一部と信じる理路を見出さなければならないことになる。もとより、そうでなければ我々も、自らが「自然の一部」であることを自然の中から信じることはできない。「血中の虫」の虚構は、こうした部分全体論へと我々を導くのである。

結論

本稿の目的は書簡32を読解するための土台を提供することであった。そのために筆者は、この書簡で部分全体論が提示されることになった文脈を確認し、書簡の前半部を読み進めた。こうして本稿で得られた解釈の方針は、ほとんど消極的なものとなる。すなわち、書簡32の部分全体論はどのようなものでないのか。

第二節での読解が正しければ、スピノザは自然の諸部分をヒエラルキーの観点から見る考え方を予め排除していることになる。この意味において、彼の部分全体論は、愚かに見える人々のふるまいをそれ自体で劣ったもの、た

たとえば自然における特権的な地位を示す人間的なものに対する動物的なもの、としてみなすことを許容しないだろう（解釈に対する第一の制限）。さらに第三節での読解が正しければ、スピノザはあるものがある全体の部分であることを他のものとの水平的な関係によって規定しているのであり、またその際に、ある全体をその構成要素のたんなる集合とする考え方を排除していることになる。したがってこの部分全体論は、「全自然とそのすべての部分」について知ることなく自らが「自然の一部」であることを信ずることを妨げないだろう（第二の制限）。これらの議論は最後に、「血中の虫」を宇宙の中の人間に対する正確な類比とする解釈へと結実し、それと知らずに超越的な視点呼び込む解釈を退ける。では、こうして要請されるいわば内在的な部分全体論の内実はいかなるものか。この書簡をさらに読み進めるなら、我々は自らのうちに現に生じている「変化」をこの部分全体論の鍵概念として見届けるだろう。それについては稿を改めて論じたい。

注

- 1) 書簡の引用に際してはEpと略記、ゲブハルト版に即した書簡番号を付す。また、必要に応じてゲブハルト版の巻数と頁数、行数を指示する。翻訳はスピノザ(1953)を用いたが、原文に即して適宜表現を改め、明らかな誤りは直した。『エチカ』からの引用は以下のように略記する。P = 定理, D = 証明, S = 備考, 付録 = App, 序文 = Prae. テキストはSpinoza (1925)を用い、邦訳はスピノザ(1951)を参考にし適宜表現を改めた。その他の著作については、CM = 『形而上学思想』、KV = 『神・人間ならびに人間の幸福についての短論文』、PT = 『政治論』と略記する。
- 2) 書簡 32 の日付は 1665 年 11 月 20 日であり、当時は今で言う第二次英蘭戦争の状況下にあった。遡ること同年 6 月 13 日には、オランダはローストフトの海戦にてイングランドに大敗を喫している。オルデンバークからスピノザに宛てられた書簡 29 は 1665 年 9 月、それに対するスピノザの返事（書簡 30）は同年 9 月または 10 月、さらなるオルデンバークの返事（書簡 31）は同年 10 月 12 日である。書簡 29 で言及される「イングランド人が心待ちにしている」という「第二の海戦」とは、かの海戦に続くイングランドの攻撃、ないしオランダ

の報復を指すと考証される。また、1665 年という年を象徴する他の事柄(疫病や宗教的混乱)については、cf. Garrett 2003, 31-2.

- 3) たとえば、Guigon (2012) では、ここでの部分の概念は文通相手に合わせた表現にすぎず、あくまで自然は部分をもたないとされる。また、Rosenthal (2019) では、自然と部分の関係はたんに実体と様態の関係を理解しやすくするための類比とされる。
- 4) この反論で筆者は『短論文』内部のテキストの関係から見てもそれが論拠となりえないことを示そうとしている。『短論文』から書簡 32 を経て『エチカ』へと至る部分と全体の概念の変遷を跡づける研究として、cf. Laveran 2014.
- 5) この反論はあくまで「自然の一部」に焦点を絞ったものである。より一般的に「部分」という概念が『エチカ』において担う重要な役割については、cf. Laveran 2014; Sikkema 2015.
- 6) 「調和する」と「不調和である」という訳語は両者の語源が異なることを踏まえると正確ではないが、両者の対立を表現できればさしあたり問題はないと判断した。
- 7) 適合についてバイスは、それをある種の自発的な行為としたうえで決定論との矛盾を問題として指摘し、この適合のモデルが複数の振り子のあいだに生ずる「共振」であると解釈することでその問題を解決する。この解釈の是非は措くとしても、適合を性質の共有ではなくあるプロセスとみなす点に筆者も同意する (cf. Buyse 2018, 111)。
- 8) スピノザが部分と全体の概念を、同一水準の他のものとの関係において考えているということを分析してみせたのはサクシュテーターの功績である (cf. Sacksteder 1978)、Laveran 2014 や Andrault 2014 の研究はこの解釈の影響下にあると言える。
- 9) 書簡 32 について、アドラーはロバート・フックの *Micrographia* の影響を、バイスはホイヘンスによる振り子時計の実験の影響を見ている (Adler 2001, Buyse 2017)。
- 10) 「動脈血が赤く、静脈血がよりくすんでおり、リンパが無色で乳糜が白いということは、これら構成物の差異についてもそれらが互いに「一致する」仕方についても我々に教えない。それらの一面的な差異は、同じ流体への参加を決定できないし、また、身体全体に血液を送っている外見上は異質的な流体を再結合する血液循環という観念を否定するために用いることもできない。」(Andrault 2014, 68)

参考文献

- Adler, Jacob. "Spinoza's Physical Philosophy," in *Achiv fur Geschichte der Philosophie* 78, pp. 253-76, 1996. reprinted in Lloyd, G.(ed.,) *Spinoza, Critical Assessments of Leading Philosophers II*, New York, Routledge, 2001, pp. 165-189.
- Andrault, Raphaële. *La vie selon la raison : physiologie et métaphysique chez Spinoza et Leibniz*, Paris, Honoré Champion, 2014.
- Buyse, Filip. "A New Reading of Spinoza's Letter 32 to Oldenburg: Spinoza and the Agreement between Bodies in the Universe." In: Gábor Boros, Judit Szalai and Olivér István Tóth (eds), *The Concept of Affectivity in Early Modern Philosophy*, Budapest, 2017, pp. 104-123.
- Garrett, Aaron. *Meaning in Spinoza's Method*, New York, Cambridge University Press, 2003.
- Guigon, Ghislain. "Composition and Priority," in *Spinoza on Monism*, edited by Filip Goff, 183-205. New York, Palgrave, 2011.
- Laveran, Sophie. *Le Concours des parties – Critique de l'atomisme et redéfinition du singulier chez Spinoza*, Garnier, 2014.
- Steno, Nicolaus. *Observationes anatomicæ*, Lugduni Batavorum, apud Jacobum Chouët, 1662.
- Ramond, Charles. *Qualité et quantité dans la philosophie de Spinoza*, Paris, PUF, 1995.
- Rosenthal, Michael. "Spinoza on Beings of Reason [Entia Rationis] and the Analogical Imagination." In *Spinoza in 21st-Century American and French Philosophy: Metaphysics, Philosophy of Mind, Moral and Political Philosophy*, edited by Charles Ramond and Jack Stetter, London, Bloomsbury Press, 2019, pp. 231-250.
- Sacksteder, William. "Spinoza on Part and Whole – The worm's Eye View," in Shahan, R. W. & Biro, J. I.(eds.,) *Spinoza: New Perspectives*, Norman, University of Oklahoma, 1978, pp. 139-59.
- Spinoza. *Spinoza Opera*, 4vols., Carl Gebhardt, Carl Winters, 1925.
- スピノザ、『エチカ(倫理学)』(上・下巻)、畠中尚志訳、岩波書店、1951。
- 、『スピノザ往復書簡集』、畠中尚志訳、岩波書店、1953。
- Sikkema, James. "Virtual Mereology: Power, Affect, and Relation in Spinoza's Ethics." McMaster University, Hamilton: Ontario, PhD Thesis, 2015.

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

The Belief of Ourselves as a Part of Nature from within it:
An Introduction for the Reading of Letter 32

Tatsuya TACHIBANA

This paper provides preparation for understanding Spinoza's thoughts on the part and whole in Letter 32 to Oldenberg. This letter has some interesting parts, which include his thoughts on part and whole, and so they are often referred to and interpreted separately. However, I try to find a coherent process for reading them altogether. To do that, in this paper I establish his intention and analyze the first half of the letter.

I start by confirming the context in which Spinoza expresses his thoughts in the letter. From there, I put forth two constraints for understanding it. The first constraint is that it must encourage a kind of ethical attitude that does not permit us to mock and grieve any human natures as inferior, and the second constraint is that it must give a reason to believe in ourselves as "a part of nature" without knowledge of "total nature and all its parts." Next, I discuss the meaning of Spinoza's premise. He calls to the reader's attention that there exists neither beauty nor ugliness, order nor confusion in nature. I interpret this based on the premise that Spinoza eliminates any hierarchies in nature (satisfying the first constraint,) and eliminates the idea of viewing parts and wholes from a hierarchical perspective. Then, I confirm his basic notion of part and whole, where I understand his idea as the following: he judges if one is whole or part by the horizontal relationship between itself and the other. This idea does not require all parts to know their whole, nor a given whole to know its parts (satisfying the second constraint.) Finally, these discussions lead to my interpretation of the fiction given by Spinoza of "a worm in blood" as an accurate analogy to "a human in the universe." I conclude that he avoids appealing to the perspective of transcending the parts to thinking of ourselves as a part of nature, and that the rest of the letter must be read with that in mind.